

7) ウツボグサ＝靱草／空穂草／夏枯草

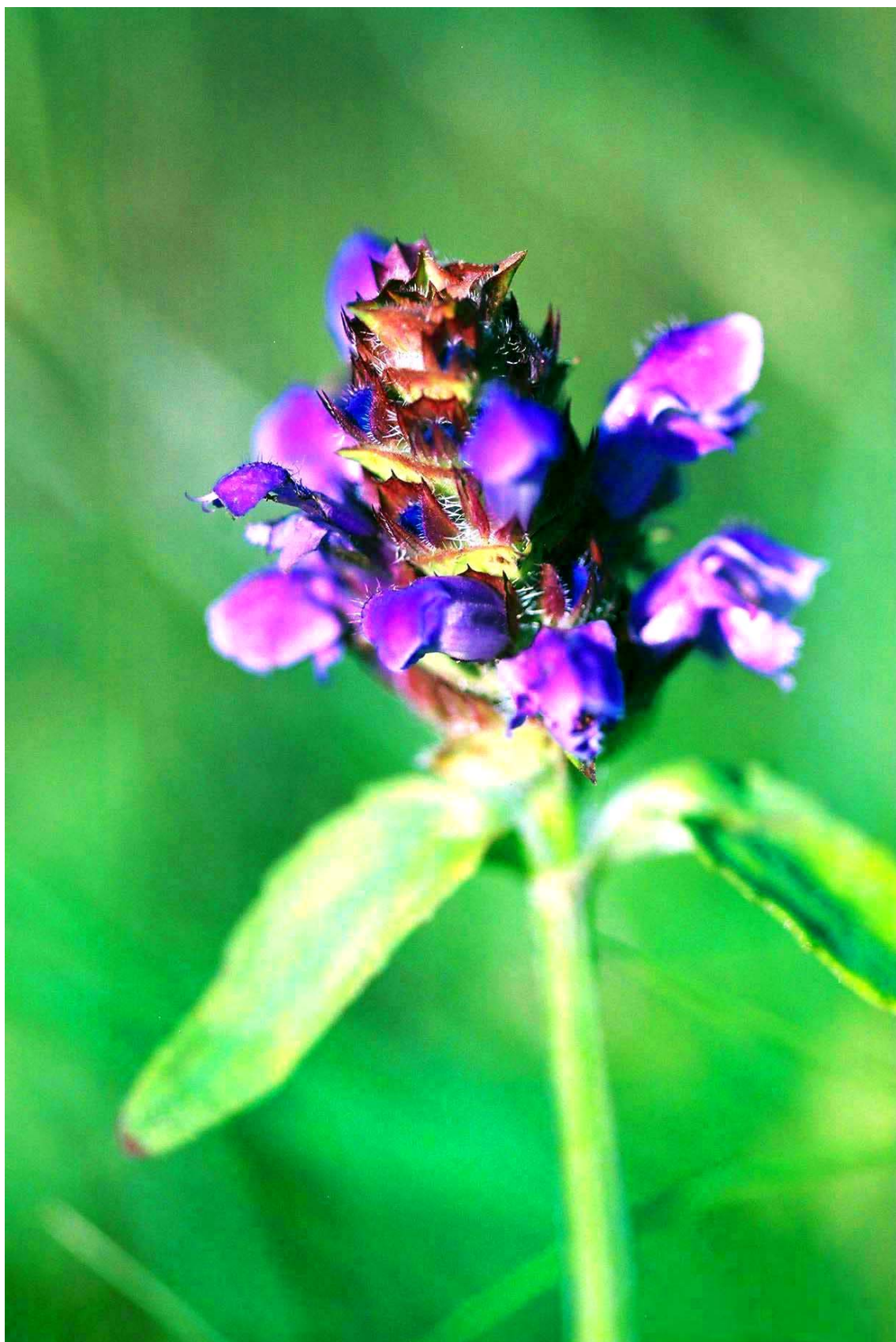
ウツボグサはシソ科の多年草で、東アジアの温帯から寒帯に広く自生し、世界では熱帯産のものも含めて 7 種が分布する。日本では全国各地の陽当たりの良い山野に見られる。茎は四角形で直立し、高さは 10～30cm ほどになり、全体に白い粗毛がある。葉は長さ 2～5cm の長楕円形で対生し、長い柄があり、若葉は食用になる。夏から秋にかけて、茎頂に長さ 3～8cm ほどの花穂をつけ、紫色の美しい唇形花を密につける。和名の由来は花穂が矢を入れる『靱』に似ているためであり、漢字では「空穂草」と記すことも多い。別称としてカコソウ(夏枯草)、ヒグラシ、イッポンソウ、ホイトノマクラ、スイバナ、チチグサ、カゴクサ、チドメグサなどがある。学名は『*Prunella vulgaris*』で、**属名はラシャ布という意味**、種小辞は普通のという意味である。イギリスでは『all・heal』『heal・all』『self・heal』などで、『heal』とは回復させることであり、中国での呼称は『夏枯草』である。

中国の文献に『夏枯草』が初めて現れるのは、『神農本草経』である。神農とは 4000～5000 年前に存在したと考えられる古代中国の神で、その姿は『人身牛首』、つまり首から上が牛で下は人間の姿をした『薬祖神』と考えられ、書名に『神農』が与えられたのはこのためである。その内容は後世の人々が古代中国から伝わる薬物知識を収録したもので、植物や動物、鉱物など薬効のある全てが記載されている。しかし著者も成立年も定かではなく原本も散逸し、5～6 世紀頃に陶弘景が著した書物にかなりの部分が引用されていたためその概略が残り、これが近世になり復元補完され今日に至っている。その特徴は上薬として 120 種類、中薬として 120 種類、下薬として 125 種類、合わせて 365 種類、つまり一年の日数分だけ、人体に適応する強さに応じて分類している点である。夏枯草は下薬に分類され、健康回復の治療薬で、病気を治すものの、毒性があるため長期にわたる服用はよくない。とされている。

ウツボグサの花穂は 8 月～9 月初旬、立ったまま急に枯れて来る。花穂が褐色になり始めた頃、採取して乾燥させたものが漢方の『夏枯草』である。タンニンの他、塩化カリウムを主成分とする無機塩を 3.5% も含んでおり、煎じて消炎性の利尿剤として腎臓炎、膀胱炎、さらには乳腺炎、高血圧症、脳出血、肋膜炎、糖尿病、子宮病、甲状腺肥大などにも効果があるとされ、日本では頸部リンパ節結核（瘰癧＝ルイレキ）の治療薬として古くから知られている。また外用薬として結膜炎の洗眼液として、口内炎や扁桃腺などにはうがい薬としても利用されてきた。ウツボグサの生の茎葉や根には麻酔性があるため、擦り潰して打撲傷などの患部に塗るとよく、葉を煎じて塗ることも行われていた。ヨーロッパでもこの近縁種のタイリンウツボグサを民間薬として用い、肺結核や胃腸病などの治療に古くから利用していた。ウツボグサは大変に重宝な薬草でもあったから、前述のように英語では『heal・all』『all・heal』、つまり万能薬と言われていたわけで、『self・heal』は民間薬を意味している。



美しい花を咲かせるウツボグサには、たいした薬効がある(長野県蓼科高原)。



ウツボグサは塩化カリウムを主成分とする無機塩を 3.5%も含んでいる(長野県蓼科高原)。



ウツボグサは甲状腺肥大、乳腺炎、高血圧症、結膜炎などの治療薬(長野県蓼科高原)。 [目次に戻る](#)